

沙門はいんのCL 閑話 49

趙州狗子
—「無」と「現実」—

遠藤博因 hakuin@river.ocn.ne.jp



皆さんこんにちは。実は前回で禅のテキスト「無門関」の 48 則（話）を終えてしまい、次は何を題材にしようか考えていました。日頃の勉強不足もあり適当な課題が見当たらず、もう一度「無門関」を採り上げてみることにしました。当然なことです、禅の修行はこれでおしまいというゴールはありません、常に新しい眼で課題と向い合って研鑽しなくてははいけません。以前の課題だからと言ってそのまま前と同じように向き合っていたのでははいけません。そのような意味でもここでもう一度「無門関」に取り組もうと思います。

ある時、一人の僧が趙州和尚に尋ねました。
「犬には仏性があるのでしょうか、それとも無いのでしょうか。」
趙州和尚は、「無」と答えた。

このお話は、禅の公案修行のなかで最も有名なもののひとつです。修行僧は師僧からこの趙州和尚の「無」という公案に対して、自分の見地を求められます。座禅中に相図の鐘がなり師僧の部屋へ行き一対一の状況で自分の見地を述べなければいけません。「ある」と言っても「ありません」と言っても首を横に振られ、師僧の退室を促す鈴が振られます。公案のコメント部分として頌という短い漢詩が付けられていますが、そこには“うかつに有る無しに言及するのは命取り”と記されています。いつも書いているように禅は言葉ではありません、実践です。自らが「無」になりきらなくてはいけないのです。

CL 的見地から、犬に仏性があるか、ないかということは、手にとってみることができない具体的なものではないので、「ない」というしかありません。だからと言って人との心や仏心というのも手にとることができないので、存在しないのでしょうか。CL は人の心や動物の心を否定しているわけではありません。心や魂、また感情など肯定しそのような不確実なものにとらわれず、現実を目を向けてなすべき行動をとるとというのがCL 考えかたです。

レイノルズ先生のコメントでは、あなた自身の過去、好み、社会的地位、運命、資産にかかわらず「現実」に逆らうことはできない。あなたは「現実」と不可分であり、最良の方策は「現実」を受け入れ、建設的な振る舞いで「現実」に影響を与えるように最善を尽くすこと、と書かれています。『Gateless Reflections by D.K.R』

般若心経の中に「色即是空、空即是色」（しきそくぜくう、くうそくぜしき）というくだりがあります。高い低い、多い少ないという現実にある差別の層でできた「色界」も、全て平等の「空界」に裏打ちされていて、裏表の関係だと言っています。「ある」とか「ない」といったことも同じように表裏一体の関係にあるのです。仏教ではこのことをよく理解して、菩薩様のように慈悲の行いに励みなさいと教えています。CL では「現実」を受け入れ最善の行動をとりなさいと教えてくれています。

いつものように、CL と仏教の教えが共通することを知らされました。

また今回もWEBで皆さんとお会いできるご縁に感謝して

合掌

 目次へ戻る